いわゆる丁寧語「侍り」について

―「枕草子」の用例をめぐって―

八回生　渡辺布威

高校二年古典の教材で「枕草子」の次のような一段を扱った。

中納言参りたまひて、御扇奉らせたまふに、「隆家こそいみじき骨は得①はべれ。それを張らせて参らせむとするに、おぼろけの紙はえ張るまじければ、求め②はべるなり。」と申したまふ。「いかやうにかある。」と問ひきこえさせたまへば、「すべていみじう③はべり。『さらにまだ見ぬ骨のさまなり。』となむ人々申す。まことにかばかりのは見えざりつ。」と、言高くのたまへば、「さては、扇のにはあらで、くらげのなり。」と聞こゆれば、「これ隆家が言にしてむ。」とて、笑ひたまふ。かやうのことこそは、かたはらいたきことのうちに入れつべけれど、「一つな落としそ。」と言へば、いかがはせむ。（注1一〇二段）

この文中隆家の言葉の部分に使われている「はべり」が問題となった。傍線の部分を中心に口語訳すると、

①私隆家は大へん上等な骨を持っております。

②骨にふさわしい上質な紙を探しております。

③骨の材質といい、形・できばえといい、すべて立派でございます。

となる。①②の場合と③の場合とでは「はべり」のニュアンスが違うのではないかということになった。①②は隆家を主語とする動詞についており、③の「いみじうはべり」は主語が扇の骨になる。自己の動作を表す動詞についた「はべり」は単なる丁寧語ではなく、むしろ謙譲語と考えられるのではないかというのである。

しかし、謙譲語というのは、為手の動作を低めることにより、その動作の受手に敬意を表わすものであり、聞手敬意の場合は丁寧語というふうに一般に認識されており、高等学校で取り扱っている文語文法でも、「はべり」「さぶらふ」について、

(1) 補助動詞のときは丁寧語である。

(2) 動詞のときは、その動詞を受ける人があれば謙譲語、なければ丁寧語である。

(3) 謙譲語の下に用いられているときは丁寧語である。

（日栄社・要説文語文法）

と明記されている。つまり、動作の受手がある動詞の場合のみ謙譲語とされているのである。

そこで思い浮かぶのが下二段活用の「給ふ」である。これは「侍り」とよく似た用法だが謙譲語とされている。勿論「丁寧語とする説もある」（日栄社・要説文語文法）と一言付け加えてはあるが。「枕草子」中、この「給ふ」の用例は

「いかでかはめでたしと思ひ侍らざらん。御前にも『なかなるをとめ』とは御覧じおはしましけむとなむ思ひ給へし。」（八六段）

「『年のうち一日までだにあらじ』と、人々の啓し給ひしに、昨日の夕ぐれまで侍りしは、いとかしこしとなん思う給ふる。」（八七段）

「いとうれしく立寄らせ給へるしるしに、たへがたう思ひ給へつるを、ただ今おこたりたるやうに侍れば、返す返すなむよろこび聞えさする。」（一本二三段）

の三例のみであるが、共に「思ふ」という話し手の動作について、「存じました」「存じます」という意になる。「侍り」を使用してもさしつかえないところで、ただ重用を避けたかと思えるだけである。

伊藤和子氏[注2]は「給ふ」「侍り」共に話し手の聞き手に対する卑下を表すことばで、「侍り」は用法が広く、「給ふる」は用法が特殊であった。というようなことを述べておられるし、本学二十七回生の高原[注3]さんも「『給ふ』は自分自身、又は自分側の人間の『思ふ』『見る』『聞く』『知る』という動作を卑下することによって、聞き手に敬意を払う謙譲語であった。つまり、『給ふ』は話し手と聞き手の関係で使われた」と述べておられる。このお二人の研究からしても、「侍り」は「給ふ」と近似性をもったことばで、「給ふ」より用法が自由であるが、自己の動作についた場合は、自己の動作を卑下することによって、聞き手に敬意を払う謙譲語と考えてよさそうである。

これに関して、興味あるお二人の説を次に引用させていただく。阪倉篤義博士[注4]は

本来一種の謙称であるが、ただその謙譲の対象は、しかと定めきれない場合が多い。勢ひ、その行為自身を、ただ謹しみ深く、ひかへめに言ひ表はさうとする絶対謙称に近づくのである。これに当るべき適当な言ひ方を口語の中に見出すことは、困難であるが、強ひて言へば「達者で過させていただく」の如き言ひ方を想ひ合はせてもよからう。（中略）話し手の自ら謹みへり下る気持の間接的表現に外ならないであらう。同じことは第三人称的主語に就いても言ひ得る。例へば、

その北の方なむ某が妹に侍る（源氏物語・若紫）

桜の散り侍りけるを見てよめる（古今集・春下）

に於ける「侍り」も亦、素材間のありかたとも言へやうが、然しこのやうな表現に於ては、右の「北の方」「桜」が、いはば話手の側に属するものとして把へられてゐるのであって、これを通じて話手の気持が表はされてゐるものと見るべきであらう。その事情は下二段活用の「給

ふ」に相通じるものがあると思はれる。

と述べておられ、また石坂正蔵先生は、

ある人[注5]（又は物事）の動作存在が、その他のある人（や神）の勢力の支配下にある如き意識から、その人（や神）との被支配的関係に於て言表する待遇を言ふのである。被支配待遇の語は、その関係の論理的若くは文法的でない点に於て「奉る」「申す」等の所謂関係謙語と区別され、一種の関係と有する点に於て、口語の「ます」（助動詞）などの一般丁寧語とも別物である。

中古文[注6]の「はべり」には謙譲語と丁寧語とがあるようだが、丁寧語は謙譲語から生じたものであり、補助動詞の用法のものも、多くは謙譲語とみるべきである。

とさえ述べておられる。このお二人の説を思い合わせてみると、「侍り」は謙譲の対象を聞き手と限定するのでなく、もっと大きな存在を対象として「……させていただく」という話手自ら謹みへり下る気持の表われであって、当面の問題としている③の「いみじうはべり」にしても、その主語である扇の骨が話手側のものとして意識された丁重な表現ということになる。私としては大へん惹かれる解釈であるが、高校の教材として生徒の動揺を避ける為には、文法教科書に基づく他はなかった。ただ、この三ケ所の「侍り」が共に丁寧語の範疇に入るとしても、①②は謙譲の意味が濃厚に残存しており（聞き手敬意）、③は丁寧語化した用法だという違いは生徒に理解して欲しいし、また、下二段活用の「給ふ」を謙譲語とするならば、補助動詞「侍り」の中にも同じような用法があるのではないかという疑問が、生徒側から出てくるようになることを期待したい。そして、「給ふ」「侍り」共に、「聞き手敬意の謙譲語」という一面を文法教科書の中にも打ち出すべきではなかろうかと思うのである。

次に、文法書では一般に、丁寧語「侍り」は（謙譲語「給ふ」も）口語の「マス・デス・ゴザイマス」の意とされているが、果してそうかという問題にふれてみたい。

前掲の扇の骨の一段に於て、われわれは、丁寧語が使用されていない部分も、例えば「……と人々が申します。本当にこれほどのものは見られません。」と訳し、これに対する清少納言のことばも「それでは扇の骨ではなくてくらげの骨というわけでしょう」と、丁寧な語調に訳している。

阪倉博士は「源氏物語」夕顔の巻の一節を引用されて、次のように述べておられる。

家臣[注7]（惟光）の主（光源氏）に対する言葉に於てすら、「侍り」の用ゐざまは、必ずしも規則的ではない。このやうな場合、口語に於ては、「ます」「ございます」の類が、ほぼ規則的に文末に表はれてくるのに対して、やや異った感じを懐かしめる。しかも われわれは右の「侍り」に「ます」「ございます」といふ口語を宛てると同時に、「はひわたる」「さめぬめり」にも、「覗きにきます」「なくなったやうでございました」（潤一郎訳）の如き口語訳を宛てて済ましてゐるのであるが、それでは「侍り」が特にここに用ゐられてゐることの意味

は、果していづこにありやといふことになるであろう。そこで、「枕草子」の会話文に注意してみると、例えば、清「なにか。この歌よみ侍らじとなん思ひ侍るを。ものの折など、人のよみ侍らんにも、よめなどおほせられば、えさぶらふまじき心地なんし侍る。いといかがは、文字の数知らず、春は冬の歌、秋は梅の花の歌などをよむやうは侍らむ。されど、歌よむといはれし末々は、すこし人よりまさりて、『その折の歌はこれこそありけれ。さはいへど、それが子なれば』などいはればこそ、かひある心地もし侍らめ。つゆとりわきたるかたもなく、さすがに歌がましう、われはと思へるさまに、最初によみ侍らん、亡き人のためにもいとほしう侍る」と、まめやかに啓すれば、……（九九段）

のように、中宮にまめやかに啓する場合には殆ど文末には「侍り」が使用されている。

一方、次のような対話には「侍り」の使用は少ない。

わざと呼びも出で、逢ふ所ごとにては、斉信「などか、まろを、まことにちかく語らひ給はぬ。さすがにくしと思ひたるにはあらずと知りたるを、いとあやしくなんおぼゆる。かばかり年ごろになりぬる得意の、うとくてやむはなし。殿上などに、あけくれなきをりもあらば、なに事をか思ひ出でにせむ」とのたまへば、清「さらなり。かたかるべきことにもあらぬを、さもあらんのちには、えほめたてまつらざらむが、くちをしきなり。上の御前などにても、やくとあづかりてほめきこゆるに、いかでか。ただおぼせかし。かたはらいたく、心の鬼出で来て、いひにくくなり侍りなん」といへば、……（一三五段）

行成「その文は殿上人みな見てしは」とのたまへば、清「まことにおぼしけりと、これにこそ知られぬれ。めでたき事など、人のいひ傳へぬは、かひなきわざぞかし。また、見ぐるしきこと散るがわびしければ、御文はいみじう隠して、人につゆ見せ侍らず。御心ざしのほどをくらぶるに、ひとしくこそは」といへば、行成「かくものを思ひ知りていふが、なほ人には似ずおぼゆる。『思ひぐまなく、あしうしたり』など、例の女のやうにやいはむとこそ思ひつれ」などいひて、わらひ給ふ。……（一三六段）

この場合の対話の相手である藤原斉信や藤原行成は、頭中将や頭弁とはいえ、作者と親交のあった相手である。中宮に申しあげる丁重なことば使いに比べると「侍り」の使用はごく少く、話の内容もさることながら、ことば使いもくつろいだ感じになっているといえよう。では丁寧体ではないのかというとそうではなかろう。「のたまふ」「給ふ」などの敬語が使われている相手なのだから、現代語でいえば当然丁寧表現するところであろう。

また、「侍り」の下手な重用はばか丁寧ともとられたようで、次のような表現は、話の内容とはうらはらに、笑いをかっている。

「あからさまにものにまかりたりしほどに、侍る所の焼け侍りにければ、がうなのやうに、人の家に尻をさし

入れてのみさぶらふ。馬づかさの御秣積みて侍りける家より出でまうで来て侍るなり。ただ垣を隔てて侍れば、夜殿に寝て侍りけるわらはべも、ほとほと焼けぬべくてなん。いささかものもとうで侍らず」などいひをるを、御匣殿も聞き給ひて、いみじうわらひ給ふ。（三一四段）

以上のように見てくると、「侍り」は、すべての会話文に丁寧語として規則的には使われていないという点、また、敬うべき聞き手側のものについては用いられていない点で、口語の「マス・ゴザイマス」という一般丁寧語とは異なるものと考えられる。要するに、聞き手に対する改まった態度を示す物言いであって、補助動詞「侍り」をただ「丁寧語でマス・ゴザイマスの意」として片づけてしまうのは、「侍り」の性格を無視した、細やかさを欠くことになりはしないかと思うのである。

そこで、かの「扇の骨」の一段も、中宮に対しては弟隆家が「侍り」を使って自己を卑下し、丁重にお話し、あとはその場にいた清少納言に向って、あるいはいくばくかの興奮をもって独白するように「まことにかばかりのは見えざりつ」と言い、清少納言もすかさずそれに「くらげのななり」と応じ、隆家が「その言葉気に入った。私の言葉としてしまおう」と笑う、といった場面が、「侍り」の用法に注意することによって彷彿としてくる。隆家対清少納言となるとおのずから「侍り」は消えているのである。

注1, 以下引用文の段数は、岩波書店「日本古典文学大系19」の段数による。
注2. 「源氏物語にあらわれた『給ふる』と『侍り』」国語国文第二十二巻一号
注3, 「下二段活用補助動詞『給ふ』について」国文研究二十五号
注4, 「『侍り』の性格」国語国文第二十一巻第十号
注5, 「書紀古訓の『ハヘリ』『ハムヘリ』の解釈」敬語史論考、文進堂
注6. 「敬語」講談社
注7, 「『侍り』の性格」国語国文第二十一巻第十号